

大聖堂の一番向こう、赤、青、黄、さまざまない色を散りばめたステンドグラス。その手前かたひざにある、名も知らない誰かの像に向けて、僕は片膝かたひざを地につけて、両手を握りしめた。

そして。

「もう二度と僕が就職した会社でクビにならないようにしてください！」

と叫んだ。

「もう二度と僕が就職した会社が倒産しないようにしてください！」

とも叫んだ。

「ばかやろー！」

あとついでに何かに対して罵倒ばとうしてすらいた。
そんな感じで、僕の人生初の祈りは終わった。

「それでどうなったの？」

「叶えられたよ」

「ならどうして行き倒れていたのよ」

「二度と就職できなくなっちゃったからだよ」

○

異変に気付いたのは祈りを捧たもげてからしばらく経ってか
らだった。

自慢じゃないけど僕、今までいろいろな会社で働いていた経験はあるから、能力面に関しては他より劣っていない自信はあったし、むしろ面接に至ってはもう完璧すぎる腕前だったのね。だから独り立ちして三年たった頃には、どんな会社に志望してもたいてい合格は貰えるもらようになってた。

でも不思議と、祈りを捧げた翌日からは、面接で普通に落とされるし、働きたくてもそもそもその土俵に立たせて貰えなくもらなつてた。

悔しくなつて、求人募集の掲示板をあさつて片っ端からいろいろな会社に行つただけけど、どこでも同じように断られた。集団面接で僕以外ダメダメなやつばかりで受け

答えもまるできいていないやつ達が合格して、なぜか僕だけ落とされるなんてこともざらにあるくらいに。

それで、仕方なしに今まで貯めてきた貯金を切り崩しながら生活している中で、僕、気づいちゃったんだよね。これ、多分祈りが叶えられた結果だったんだよ。

「——一度と就職しなければクビになることも倒産することもない、ということね。……随分ずいぶんと厄介やっかいな呪いにかかられたものね」

「……呪いね」祈りのことを言っているのだから、なるほど確かに呪いといったほうが適切かも。「——それから今に至るまではたぶん語る必要もないことだろうとは思うんだけど、まあ、結局、祈りのせいだと分かっ

も、それをどうすることもできないじゃん？ 祈りをなかつたことにしてもらおうように祈ってもみただけけれど、効果はなかつたよね」

捧げられた祈りが叶えられる確率は国民の誰も分からない。僕みたいになつた一度で祈りを叶えた者もいれば、何年も同じ祈りを捧げて未だ叶わない人だっている。

そういう事情から察するに、果たして僕は運がいいのやら悪いのやらよく分からない。キレていいかな。

「それで就職したくても出来ずに、貯金ばかり切り崩していく日々が続いて、ああいう状態になつたということね」「うん死にかけた」

祈りを取り消す祈りを捧げながら、就職先を探し歩く毎

日だった。掲示板に貼ってある張り紙を端から順に全部片
つ端から当たり続けただけけれど、結果は変わらなかつた。
そしてついに貯金が底を尽いた。
もはやすぐにでも仕事を見つけないと死に至る未来しか
見えなかつた。

「で、今日ね、『戒祈屋リリエール』っていう、妙な店の
面接に行く途中だったの」

行き倒れていたとき手に持ってた紙切れはその募集用紙
ね。「なんかとつても怪しい感じの店だった。『生きてる人
間で奴隷のように働ける人であり、かつ秘密を守れて、余
計なことに口を挟まはさない者を望む』って募集要項に書いて
あるし。でも給料はそんなに悪くないし。これ絶対何かヤ

「バい仕事じゃん」

「え、うそ……」

「ん？」 僕変なこと言ったかな？ まあいいや。「まあ

……、普段の僕だったなら絶対こんな仕事の面接なんて行かないんだけど、あいにく僕の現状はそんなこと気にも留めてられなかったからね、行ったの」

「けれどたどり着けなかったみたいね、あの様子だと」
食後のコーヒを一□つけながら、彼女は言う。

まるでもってその通り。